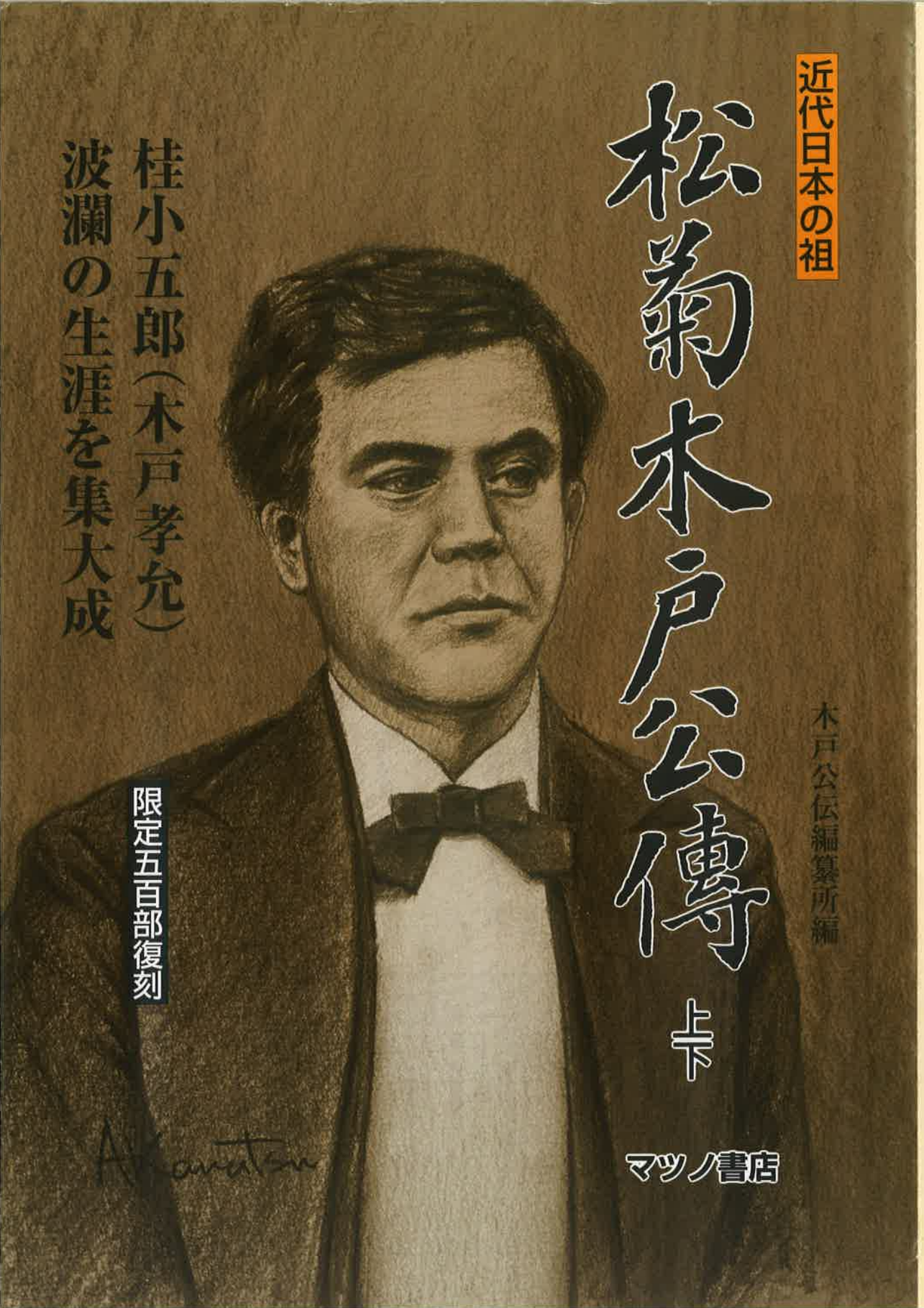

内容見本

木戸孝允公年譜（其二）自慶應元年 至明治元年

公三十三歳

慶應乙丑元年

正月朔日　公、但馬に在りて慶應元年を迎ふ

二月七日　長藩士村田藏六下關及び其他藩内の戰況等を公に報ず

二月十日　長藩士野村靖之助繪堂驛の戰況及び諸隊奮起等の狀を報じ且つ公の速に歸藩せんことを促す

二月二十一日　前尾張侯徳川慶勝長藩主父子を江戸に召致するの不可を幕府に陳述す

是月　長藩士伊藤俊輔村田藏六相謀り出石の人廣戸甚助をして對馬に赴かしめ公の夫人松子を伴ひて但馬に歸り公に侍せしむ

四月五日　土佐藩士中岡慎太郎山口に來り翌日長藩世子毛利元徳に謁して太宰府の事情を具陳す

四月八日　公、其夫人松子及び廣戸甚助其弟直藏等と共に出石を發す

四月二十日　公、大阪に出で神戸に上陸し更に讃岐に寄港して是日歸國の途に就く

四月二十六日　公、下關に着して桶屋久兵衛の宅に宿す

四月晦日　中岡慎太郎、公既に下關に歸るを聞きて竊に之に面晤す

五月四日　公、村田藏六を山口に遣はし防長二州一和及び民政軍制の整理を藩政

「年表学者」としてもしられる妻木忠太氏による詳細綿密な「木戸孝允年表」が百三十頁もついています。

木戸孝允を通してみる明治維新史

札幌学院大学教授
北海道大学名誉教授　田中　彰

歴史には「もし」は禁句だが、「心理学的歴史分析の試み」として「パーソナリティ」の役割に照明を当てたアメリカの日本近代史家A・M・クレイグ教授（ハーバード大学）は、つぎのような興味深い仮説をたてている。

もし、木戸孝允と大久保利通が幕末の慶応三年（一八六七）に暗殺されていたら、第一に、大久保以外に誰が西郷隆盛をあつかいえただろうか、第二に、木戸と大久保がいなくて、薩長の協力が維持されたかどうか、第三に、この二人がいなかったら、いわゆる征韓派は敗れただろうか、というのである。木戸と大久保の明治維新史に果たした役割は大きかったのである。

しかし、木戸と大久保とは性格的にはまったく異なる。

大隈重信の語るところによれば、木戸は正直・誠実な人であり、雄弁であり、奇才縦横であり、詩も作れば歌も詠み、遊ぶことも騒ぐことも好きで、陽気だった、という。これに対して、大久保は辛抱強く、感情を顔色にあらわさず、他人の説はよくきき、いったん決断すると、百難を排しても遂行する意思の強さをもっており、木戸と違って寡黙で無骨無粋だった、というのである。

事実、木戸の日記を読むと、そこには喜怒哀楽を読みとることができ、大久保のビジネスライクな日記とは対照的なのである。

このたび復刻される『松菊木戸公伝』上下は、妻木忠太を編纂主任にし、ベテランの編纂委員が編集・執筆に当たり、幕末天保期の木戸の誕生から明治十年（一八七七）の彼の没までを、逸事をも含めて編年的に詳細に記述したもので、木戸の伝記の基本といえるものである。

「緒言」を寄せた侯爵井上勝之助が、「本書の記述は勉めて批判を避け文飾を去りて其事実を直叙し、専ら公の生涯に於ける深遠なる才量と偉大なる勲業とを広く世に伝へんことに留意したり」というゆえんでもある。

木戸と大久保は、ともに明治初年の岩倉使節団の副使として米欧を回覧したが、明治期のある一文は、「大久保は元来保守的の人にして木戸は改進的の人なりしが、欧米より帰り来るや、遽に豹変して大久保は改進の人と為り、木戸は却て保守的の人と為れり」と述べる。

それは大久保と木戸の、当時の先進諸国への見方のちがいと日本に対する教訓のたて方の相違を示している、といってよい。このことは前述した二人の性格とからんで、明治維新を起点とする日本近代化へのあり方を、為政者としてどう考えたか、ということでもある。

このように、木戸という人物を通して、日本近代化の一大変革としての明治維新をみようとするとき、本書は絶好の書であり、木戸孝允幕末維新史ともいえる書なのである。

松菊木戸公伝　略目次

上巻

第一編　家系と修養時代
家系と家庭
幼年時代の修養と父母の死去
壮年時代の修養

第二編　勤王時代
出仕と帰国
水藩志士との交際
水・薩両藩志士との交際
航海遠略の議
坂下門の変
上京と京摂の形情
長藩々議の一変と長井雅楽の処分

第三編　勤王時代
長藩世子の東下
対州藩の継嗣問題
岡藩との交渉
勅使の再東下
長・土両藩の紛議附吉田松陰の改葬
水戸行と周布政之助の上京
長藩主の帰国と将軍家茂の上京
賀茂社行幸と摂海守備の建議
石清水の行幸と長藩世子の帰国
勅使防備の巡見と将軍の東帰

第四編　勤王時代
長藩の外艦砲撃と勅使の西下
長藩の献金と対馬の防備
攘夷親征の朝議と七卿の都落
堺町門変後の京情と斡旋
堺町門変後の藩情と帰国
上京と朝議挽回の斡旋
長藩世子東上の議　池田屋事変
蛤門の変
但馬潜伏と帰藩
蛤門変後の藩情

第五編　勤王時代
帰藩後の政策と対幕方針の確定
芸藩出張の中止と英公使との応接
銃艦の購入と長・薩両藩の融和
幕府糾問使との応接附馬関替地論
幕使との応接
四境戦争の概要附松山藩との交渉
長・薩両藩の聯盟
公の帰国と藩主の英国水師提督引見
明治天皇の践祚と王政復古の計画

第六編　維新時代
王政復古と各国公使の朝見
耶蘇教徒の処分と長崎出張
東北諸藩の征討
江戸行幸
東京駐輦と京都還幸

下巻

第七編　維新時代
版籍奉還と国是の一定
国基の確立と賞典禄の固辞
支那・朝鮮使節の拝命　参議任官
民・蔵両省の分立　洋行中止

第八編　維新時代
新聞局の開始と新聞雑誌の発行
公の帰藩と毛利敬親の薨去
日田県暴徒の鎮定と公の帰京
制度の大変革と廃藩置県の断行
全権大使の欧・米差遣

前人未踏、宝の山

東行記念館学芸員　一坂太郎

幕末の頃、土佐脱藩の志士坂本龍馬が周旋し、長州下関の地に商社を創ったという話がある。薩長両藩をスポンサーに、関門海峡を封鎖し、船の積荷を調べ、西日本経済の主導権を握ろうとしたというのだ。

なかなか興味深い話だが、この商社の具体的な活動についての記録は、どこにも出てこない。平尾道雄氏（故人）の古典的名著『坂本龍馬　海援隊始末』（昭和四年）にも、「果たしてどれだ

け実効を収めたものか、詳でない」と、記述されているのみである。

ずっと後年、平尾氏が同著を全面的に増補改訂して発表した『龍馬のすべて』（昭和四十一年）でも、商社の部分に関しては「はたしてどれだけの成果をあげたであろうか」と、依然、謎につつまれたままなのである。

ところが、この謎は、龍馬研究家たちの知らないところで、とっくに解明されていたのである。

最近、私は、龍馬についての本を書く機会があった。商社の件につき、松浦玲先生の論文にヒントを得た私は、（もしや…！）と思い、『松菊木戸公伝』（昭和二年）を書架から引っぱり出して、目を通した。

すると、上巻の七二九頁以下に、商社の顚末が詳しく出ているではないか。それによれば、諸般の事情から下関に商社を創ることを藩主毛利敬親が許さなかったとある。そして、桂小五郎（木戸孝允）を薩摩まで遣わし、断ったのだという。敬親は「たとえ両藩の輯睦（しゅうぼく）を破るも決して賛同すべからず」と、強硬に反対したとまで、記述されている。

つまり下関の商社は、「成果」どころか、企画の段階で消えてしまっていたのだ。これでは活動記録など、残るはずがない。

こうした事例を見ると、『松菊木戸公伝』は、七十年も前に刊行された、維新史の基本文献のひとつでありながら、意外と丁寧に読まれ、活用されていないのではないかと思えてくる。恥ずかしながら私も、神田神保町の古書店で何年か前に入手はしたものの、充分に活用し切れないでいる。言い訳がましいようだが、菊判二冊、計二千四百ページ余りという大冊は、書架の飾りにはもってこいだが、いざ読むとなると、少したじろいでしまうのは、私だけではあるまい。

だからこそ『松菊木戸公伝』には、前人未踏の宝の山的な魅力が、まだまだ残されていると言える。それは木戸孝允の伝記のみならず、明治維新史のあらゆる分野にわたっているはずだ。復刻によってさらに普及し、活用され、維新史研究が発展することを、願ってやまない。

憲法制定の意見
征韓論の分裂
征韓論分裂後の事情　文部卿兼任
佐賀の乱　文部・内務両卿兼任
台湾征伐と公の帰国　（以下略）

▼本書は、妻木忠太、中原邦平、渡辺世祐、村田峰次郎ら山口県を代表する史家により、十五年の歳月と七千点の史料を駆使して、昭和二年に刊行された、唯一の本格的伝記です。
▼維新の中心人物の「批評を避け文飾を去りて、其事実を直叙した」（緒言）膨大な伝記なので、明治維新史および日本近代史研究に不可欠の史料集ともいえます。
▼内容は全四巻に分かれていますが、上下にそれぞれ二巻ずつ入っており、上下二冊で揃いです。
▼本書は昭和四十五年に京都の臨川書店から一度復刻されましたが、すぐ売り切れ、長らく稀覯本となっていました。

■体　裁　全二巻　上製箱入
菊判　二、四四〇頁
■予約特価　三一、〇〇〇円
■定　価　三六、〇〇〇円（〒1000）
■三点セット特価　申込ハガキをご覧下さい
■予約締切　'95年12月末日（厳守）
■発　売　'96年1月下旬（予定）
限定五百部（番号入）
▼僅少部数につき、品切れの際はご容赦願います。
▼書店には卸しません。

〒745 徳山市銀座2
☎(0834)(21)2195
マツノ書店

内容見本

公北垣晋太郎に天下の形情を述ぶ

坂本龍馬廣田稼之助と倶に公の旅寓を訪ふ

坂本龍馬下關を去る

黒田了介公を迎へて京都に赴かんとす

上候」と見えたるは素太郎今を以て、薩藩有志に公の意見を論詰するの時機となして之を促したるものゝ如し、適〻但馬の人八木龍藏（北垣晋太郎の變名）來りて山口に在り、公之に書を與へ、天下の形態を深憂して其衷情を陳ぶ、晋太郎もまた龍馬の來山したるに會見して上國の近情を詳にし、慨歎して措くこと能はず、龍馬の出關せんとするに托して書を公に送り、面晤して意見を吐露せんことを報ず、既にして、龍馬は稼之助を伴ひて下關に出で、公の旅寓を訪ひて京攝の形態を語り、薩藩士周旋の狀況を告ぐ、斯くて龍馬、下關に稽留すること已に久しく、高杉晋作・前原彦太郎（當時下關に在りて晋作等と倶に機務を掌る）等に會合して互に時事を談議し、また長・薩兩藩融和に關して之が籌策を講究したるものゝ如し、尋で彦太郎先づ歸山し、幾ばくもなく龍馬も下關を去り、二十一日公もまた山口に還れり。

既にして、小松帶刀・西郷吉之助等鹿兒島を發して再び東上したりしが、内外の形情を察知して長藩と融和の計畫を實現せんとし、密に之を協議して遂に決定す、越えて十二月薩藩士黑田了介（後の伯爵淸隆）下關に來り、將に公を迎へて京都に赴かんとす、蓋し了介は帶刀・吉之助等の密旨を含